

昭和36年度西大寺調査

美術工芸研究室・絵画・彫刻
建造物研究室・遺跡庭園

今回の西大寺調査は、絵画・彫刻と旧境内地測量を対象とした。絵画調査は南都七大寺総調査の一環として、美術工芸研究室全員が昭和36年8月7日から1週間にわたりて行つたもので、その概要是「西大寺絵画調査目録」と題して公表した。これらのうち資料的価値の高いものをいくつかえらび報告する。彫刻および旧境内地については、昭和30年以来継続の興正苦薩觀尊の研究の一環としておこなつたもので、美術工芸研究室彫刻室が昭和36年9・10月奥院五輪石塔・地蔵菩薩像、大黒天像内納人物を調査し、建造物研究室遺跡庭園室が11月2日より1週間にわたりて西大寺およびその周辺の地形測量を行い、縮尺五百分の一の実測図を作製した。この結果、伝称徳天皇御山荘の地に設けられた庭園を明らかにすることができたので併せて報告する。

西大寺絵画の一斑

南都七大寺総調査報告 (1)

西大寺は南都七大寺の一つで、今日でこそ法隆寺、東大寺等に比すればその堂宇の荒廃は著しく、創建当初の遺品は殆んど失われ往時を偲ぶよすがもないが、その変化に富む寺史は注目に値しよう。すなわち、西大寺造営の發端が四天王像造立にあつたり、伽藍造営工事の

支障とか、あるいは庶民と密接な関連にたつて鎌倉期の再興に主導的な役割を果した観音の活動など、西大寺独自の史的展開を指摘できる。そういふた西大寺のもつ特色を明確にしようと意図して行つた調査が、觀尊を中心とする資料の総合調査(昭和30年)であり、その資料を収録した成果が「西大寺觀尊伝記集解」(昭和31年既刊)であった。今回の調査は絵画(大半は仏教系統のもの)のみに限つて行つたものである。

西大寺の絵画といえば、平安前期とされている「十二天画像」がとりわけ著名で、その他は文殊菩薩画像(重文)両界曼荼羅図、尊勝曼荼羅図、五大虚空藏図などの数点が紹介されているにすぎず、その他は調査の機会にすら恵まれない状況であった。まして損傷、剥落の著しいものは一括して宝蔵の片隅にまとめてもらっていたり、日頃使用しない仏画類はなかなか見出しにくい有様で、その整理状態は混沌としていたといえよう。もちろん、目録もないため、先づ「絵画目録」作成を第一目的として調査に着手した。このような調査は私達の研究に裨益するのはいうまでもないが、寺院側にとつてもまことに便利なこと違いない。

総数35点、ふすま、屏風、衝立も加えるなら89点余、一つ一つについて実測調査、写真撮影を行つたが、全般についでは「西大寺絵画調

「査目録」を参照されれば幸甚である。こゝでは、前述の意味における作品をとりあげて、それらの一斑を窺うことにしてよう。

尊勝曼荼羅図 1幅 紹本著色

南北朝時代 縦2尺9寸4分 橫1尺2寸8分

画幅中央部に一大円輪をおき、その上方左右には飛雲にのる三首陀会天を配し、下方には三角印中の不動明王と半月輪中に降三世明王を位置せしめる図様である。この図様には弥勒曼荼羅と尊勝曼荼羅の2種が知られているが、両者の大きな相違点は円輪中の主尊が弥勒菩薩であるか、大日如来であるかによつている。画面の刹落によつて明瞭をかくが、本図の中尊は金剛界大日如来の印相たる智拳印を結印していると推定されるため尊勝曼荼羅とすべきであろう。表裏は殆んど欠失し、全面的に刹落ひどく当初の趣きを損じて惜まれるが、南北朝の製作と考えられる。

尚、鎌倉中期頃の製作と思われる尊勝曼荼羅図がいま一幅ある。

十六善神図 1幅 紹本著色

鎌倉時代 縦5尺7寸7分 橫4尺4寸1分

古來、仁王会、維摩会、法華会、薬師会とならんと著名な法会の一につに大般若会があつたことは史実に明白である。早くは、文武天皇大宝3年(703)にその記事をみ、その後も天平7年(735)5月24日、神護景雲元年(767)10月23日に大般若に關する記録はみられるが、いづれも広義の「消除災害、安寧國家」を祈請して大般若經を転説、講讚もしくは書写する場合が殆んどであり、どのよだな形式で大般若会が修されたかは明確には判明しない。現在、「十六善神像」といえば中尊が「釈迦」であつても、「般若」であつても、一様に大般若に結びつけて考えられているが古いところでは必ずしもそればかりではなかつ

第1図 尊勝曼荼羅図

第2図 十六善神図

たと推測される。

西大寺の大般若会には現在本図を用いている。画幅の中央に釈迦を出し、その周囲には十六善神、普賢、文殊、玄奘、深沙神等が配される通形のものである。全面的に補筆、補色があるが、中尊は格調高く古様をふんで画風の端嚴さは失われず、鎌倉中期の作と推定される。その頃、西大寺においては叡尊の活動期であり、両者の関連を考えてみるのも故なしとはされない。

寛元3年（1245）叡尊は住吉社神宮寺で請教を発願して、入宋する覚如の渡海安穩、所願成就を祈請して大般若經一部を転読した。文永元年（1264）には建長7年（1258）以来、仏師慶慶をして造らしめていた文殊菩薩像の御身に「大般若經一部六百卷」を奉納するため六百人の筆師にその書写を勧めしていたが、漸く3年後の文永4年（1267）に問題転読する運びとなり、同年7月に法華經、阿弥陀經などの經典とともに納入した。

また、文永10年（1273）に伊勢大神宮に國家護護を祈つて参拝し、宋本大般若經一部を奉納した。建治元年（1275）には國絵积迦三尊十六善神像が奉納され、7月25日には平岡社で、8月2日住吉社で、同7日には広田社の本宮に参詣して、大般若經を転讀講讀していることが知られる。また、弘安4年（1281）4月には香子山三学院の文殊堂の前で延禪房が施入した大般若經を開題供養し、翌5年10月には大鳥社で「大般若經」が行われるなど、叡尊と大般若の関連は蒙古襲来という国難も介在して極めて密接であった。

したがつて、西大寺において、本図を年一度の大般若会にしか使用

せざ、常に秘仏として公開しなかつた理由の一つに叡尊の存在を予測できるものではあるまいか。本図の製作年代は叡尊の頃とみられるし、「感身学正記」によれば大般若は前述の如く叡尊によつて幾度も厳修せられた法会であることから、本図を叡尊に結びつけて考へても差支えあるまい。尚、背面に墨書きがある。

古箱之内書付日

奉修補十六善神弘法大師五筆

奉加

寺中僧衆并齊戒衆同行者全新座

本座等奈良餅飯殿善五郎菅原又成

同近鄉衆等

法華寺尼衆等同在所中興福院後室

各々息賢延命增長福寿祈處也

慶長四己亥年十二月十三日願主玄寿

重奉修補

元禄八亥年發願 宝永五戊子年至八月上旬

修覆畢重開眼押熊
常光寺比丘円海

願主一之室密亮
清淨院 尊榮

同西大寺芝村 庄屋

山本平右衛門

表具師 奈良重間市

吉左衛門

第3図 竜王曼荼羅図

竜王曼荼羅図 1幅 絹本著色

室町時代 縦3尺5寸 横7寸5分

外題の墨書き「竜穴神 章三ヶ八幡山」によれば、いつのころからか、いかなる意義内容をもつものであるか判然とせず、西大寺においても他に類例がない。

本図は「竜穴神」として伝承されていたことが知られる。いかなる意義内容をもつものであるか判然とせず、西大寺においても他に類例がない。画綱は荒く、弘法大師図上の三點杵も極めて簡略で室町後期の作であることは容易に理解されよう。上下の画綱は同一ではないし、図様構成の異色ぶりと併せて今後の研究課題としても興味深い。

第4図 須迦三尊十六羅漢図

室町時代 縦2尺8寸2分 横1尺3寸3分
四百点近くの作品のうち、江戸は除いて製作年代の明瞭なものは後述の「弁才天」と本図のみであった。図版では明確ではないが、中央部に描かれている羅漢の持つ経巻の中に「応永十六年八月三日比丘実雅」と年記がみられる。応永16年といえば15世紀の初頭であり、本図の作風とも一致するから製作年代とみて誤りではあるまい。絵画的に特に秀れている作品ではないが、資料的に注目すべき作品である。

弁才天像 1点 板着色

南北朝時代 縦1尺5寸1分 横9寸9分

弁才天はわが国でもかなり早くからみられる尊像であるが、後世その尊格に世俗信仰的なものが濃厚に加わって、その実態は一層混乱し理解を防げている。そんな意味で本図存在のは重要であろう。刹落のため図様は明らかではないが、中尊は左右に童子を従えて坐す多臂の

弁才天である。その童子の面貌には童顔らしい微笑さがあり、筆者の熟達ぶりを察知できて興味を引く。
天 才 天
左 右 の 上 下
に 针 穴 あ
る か ら ど
こ か に 打 ち
つ け て あ
つ と 思 わ れ

第5図 弁才天像

12

。その背面には「西大寺弁才天也
四月十一日」の刻銘がある。

西大寺の絵画にみられる一つの特色は祖師の画像が数多くあることであらう。今回の調査ではじめて判明した秀れた祖師画像の一つは、

興正菩薩画像 1幅 紹本著色

鎌倉時代 縦3尺2寸2分 横1尺2寸9分

西大寺中興と仰がれる興正菩薩觀尊の画像が当寺に数多く残されていることは別に不思議はないし、他处にも觀尊画像は数多く伝えられている。しかし、大部分は年代的に若い作品が多いが、この画像は鎌倉時代の作品とみられるもので、觀尊画像としては最古のものではあるまい。描線は強く色彩も美しい。

曲象の覆被や卓被の文様は殊に克明に美しい色彩で描かれているが、惜しいことには保存悪く、全面の折れ甚しく画面の缺失さえみられる。

大和州平群郡

神南郷總持寺

常住

観応二年(辛卯)七月日

修補之同月寅五月日

壬午寛延四年(辛未)暦

後六月吉日

第6図 興正菩薩画像

と幅の裏面に墨書きがあり、それによつて南北朝と江戸期に修補されたことがしられる。

大智律師画像 1幅 紹本著色

鎌倉時代 縦4尺5寸8分 横1尺8寸

大智律師は字は湛然、湛如ともい、宋の慶曆8年に生れ、錢唐祥符寺慧鑑律師について学んだが、常に布衣を着し、錫を杖づき鉢をして乞食し、歎に仏戒を持したといわれている。宋政和6年に寂し紹興11年大智律師をおくられた。

この画像は常に布衣を着し、錫を杖づき鉢を持つての姿を描いたものであるが、肉線は下に朱線を引き上を淡墨で描く。顔面はまことに柔和に描かれているが、その描線は力強く鋭いし衣紋のやゝ太目の描線にもむだが見られない。製作は鎌倉末期と考えられるが、優秀なる作品とみられよう。画面向つて左上部に補綱があり錫杖の上部は後描きであるほか補筆もみられない。

第7図 大智律師画像

文安四年丁卯七月日 修鑿（以下4字不明）の墨書きが軸のすぐ上に透し読まれる。所々にいたみはあるがわりと保存もよく貴重なる資料である。

その他、損傷の甚しい鎌倉期の作と思われる弘法大師画像や、南北朝の作とみられる南山大師画像は数ある祖師画像の中でも優作とみられるよう。

極めて注目すべき作品と見られるものに仁王会本尊画像がある。古来、仁王会は鎮護国家を目的とする修法であり、早くからしばしば修された法会であるが、その本尊は遺品多く、例えば五大力吼、五大明王、仁王經曼荼羅等が挙げられる。しかし、この西大寺仁王会本尊はそれらのものと異なる尊形で描かれ、本尊として且つまた画像としては唯一の遺品ではあるまい。

さらに、中世以降における西大寺の信仰形態を窺う史料的画像が数多く残されているが、その主なるものは荒神画像、弁財天画像、挖損尼天画像等で室町から江戸期にわたって製作されている。それらの数が全数の約4分の1を占めるのはまことに興味ある現象といわねばなるまい。

（守田公夫・清野智海）

彫刻の調査

西大寺奥院には、釈尊の墓所と伝えられる五輪石塔と、その傍に荒れはてた地蔵堂がある。これらは昨年度もその一応の調査をしたが、本年度もまたこの五輪石塔と地蔵堂の本尊の地蔵菩薩像とを研究の対

象にした。この中で、五輪石塔は釈尊上人遷化之記の拾取遺骨事の条に「(正応3年8月25日) 五旬以後、埋(納骨宝瓶) 茶毘所之底、其上可起立一丈一尺五輪石塔之由、評定畢」とあつて、これが釈尊の遺骨を葬つたものとして間違いないものであり、また五輪塔としてひじょうに大きく立派なものであるから、これをその周辺をも含めてかなり詳しく実測したわけである。また地蔵堂の本尊の地蔵菩薩像は釈尊などよりかなり後年の室町時代のものであるが、この像には永正11年(1514)に仏師明琳房仙算がこれを造つたとの銘があるのと共に、この像内にかなり多くの納入物をもつていて、これ等によつてこの真言律宗系の造像の有様がよくわかるものであるから、これも敢て研究に

第8図 西大寺奥院五輪石塔

等の珍しい納入物があつて、鎌倉中期頃における大黒天信仰の有様を明らかにしているのは注意しなければならない。

(小林 剛・長谷川誠)

旧西大寺境内の地形と水系

奥院から北北西に向い約200mのところ、伏見中学校の北側に海拔84～92m前後の台地が残つてゐる。その台地に介在して、東南方から北西方に向つて喰い込んだ渓流状の地形があり、その西北隅一帯は、堤防状の道路で堰き止められた水が溜り、當時海拔高85mほどの水位を保つ溜池となつてい

る。(第10・11図)

この池は幅18m長径55mあり、その中央よりかなり西方に寄つて中島がある。

とりあげた次第である。

またこの同じ西大寺の大黒天像も昨年の年報にもちよつと述べたように、この寺の淨厨に祀るために叡尊が建治2年(1276)に仏師善春に命じて造らせたものであるが、なおこの像内に

- 大黒天半跏倚像(円筒形曲物容器入) 1軀
- 弁財天懸仏(円盤形曲物容器入) 1面
- 木造五輪塔 1基
- 版本法華經八卷 4冊
- 版本大般若經理趣分(建長7年歎) 1冊
- 各種種子図像類 1巻

第9図 大黒天半跏倚像(像内納入)

うに、この寺の淨厨に祀るために叡尊が建治2年(1276)に仏師善春に命じて造らせたものであるが、なおこの像内に

第10図 伝称徳天皇御山荘跡

最初実測に入った昨年11月2日と10日に測定した時にはその水位は海抜高85mで、中島の東南方向を除き、一見陸つづきとなっていたが、それでも対岸から中島に渡ろうとすると、干上つているはずの地面が頗る泥深く、忽ち靴を没する有様で、旧池底がかなり低く、長年の間に土砂、塵芥などの堆積、下水の注入等によつて池水が汚損しているが、

この池跡の北西隅は、昔の湧泉のあつた跡と推定されるし、今日では昔ほど顯著ではないが、池底から依然としてなお少しづつの湧水があり、それが溜つて池をなしているものらしく、道路を兼ねた堤壠の下方の導水路から、依然相当量の水が東南方に流れ出し、道路の東側の

第11図 伝称徳天皇御山莊跡附近地形実測図

第12図 西大寺古図A（西大寺藏部分）

西大寺藏古図による
と元は中島に弁才天
を奉祀した清冽な園
池であつたようであ
る。

更に池の岸の状態
を観察すると、池の
短径の両岸は急峻で
あるに対し、長径の
北西隅は比較的緩や
かで、その勾配は平
均4分の1（上方は
比較的急で3分の1、
下方は緩傾斜で6分
の1）である。附近
一帯の地形を概観す
ると、北西に高く、
東南に低く傾いてい
るところから察して、

低い水田の灌漑用水として注ぎ込み、更に東南方に向つて移動しつけているのである。

さてここで西大寺藏伽藍古図を参考にして考察して見ると、そのうち3枚をA・B・Cとする。それぞれAには「本願天皇御山莊跡」

(第12図) Bには「本願天皇御殿」(元保11年) Cには「本願天皇御山莊」(元保11年)と書込まれてゐる場所の、Aではその北側の所、B及びC

ではその南方に、池の姿を描いてゐる。その一つAでは、池の北に弁才天及池の西際に近く本願神社の文字が、建物の輪かくと共に書込まれており、Bでは南北に反橋、Cは池中島に小祠(おそらく弁才天である)を描いてゐる。今日の状態だけから見て、どの図面が最も信用できるかということは言えないので、この池を中心として、西大寺本願の称徳天皇御山莊宮殿があつたことだけは信頼してよいと考える。

西大寺旧境内の地形調査はまだ完全に終つたわけではない。今後調査すべき個所は、称徳天皇御山莊の四至、北及び西京極門跡、及び神護景雲元年3月曲水宴の行わられた法院と、同年9月に行われた島院のあとなどである。

それらはこの園池をとりまく丘陵地形とどういう関係にあるのか。この園池に源を発した水流とどういう関係にあるかが興味ある問題であろう。現在この水流は溝渠によつて導かれ、西大寺本坊の北背後を真東に向つて流れ、その末は近鉄西大寺駅車庫附近に於て秋篠川に流れ込んでいるのであるが、一方東院の南下方には鈎物師池があり、本坊客殿北背後の園池、客殿から見て築地塀をへだてた南側(八角西塔

の北側、竜池院跡の北側)の小池、東塔の南方にある觀音池、四王堂前面の池(百万柳の傍)などは、何れも伏流によつて連絡しており同一水系に属するものであろう。

(森 錦・牛川 喜幸)

註

(1) 奧院地蔵堂本尊地蔵菩薩像は移されて収蔵庫に安置されてゐる。また釈尊五輪塔を中心にして、東側に圓基、西側(墓地中)に3基何れも優秀な五輪塔が残つてゐる。

(2) これと同じような地形は、西の京唐招提寺本坊(元湯屋坊・藏松院)の北池庭附近一帯にもある。そしてその山麓池辺及び池底から、今日でも小量の湧泉が見られる。おそらく水源を涵養していた背後の山林がもつと繁つてゐた昔は、もつと豊富な湧泉があつたと推測される。但し現在昔の湧泉地帯は、自衛隊員の宿舎群から放流する下水道の導水管が敷設されており、汚水が直接池中に注ぎ込んでいて、まことに不潔である。

(3) 古図A西大寺藏(画面3ヶ所に「正和五年云々」の書込みがある。室町時代を降るものではないようである。

(4) 古図B西大寺藏西大寺伽藍圖堅3尺6寸3分、横4尺4寸7分、

画面左側に「元保十一撰桂月般且以宝龜十一年十一月廿九日繪圖流記謹模写之者也」と書かれてゐる。

(註5) 古図C西大寺藏西大寺古伽藍敷地并現存當塙坊院圖、画面左下方に「元保十一曆八月吉日依弘安三年歲次庚辰古伽藍敷地之圖画現在荒廢之跡者也」と書かれている。